

《論
説》

バルカン戦争（一九一二—一三年）とヨーロッパ協調

—諸大国による紛争解決の試み—

馬場 優

1. はじめに
2. ヨーロッパ協調とバルカン半島
3. 第一次バルカン戦争
4. 第二次バルカン戦争
5. おわりに

1. はじめに

「病気の老人が旅をしていて、四人の若い奴らにおそわれ、身ぐるみ剥がされた。——老人はすっかりしおれて歩みつづけていった。ところが次の街角まできて、ふと見ると驚いたことに、例の追剥ぎのうち三人が折しも他のひとりにおそいかかって、盗品を奪おうとしているではないか。争っているうちに、だ

が肝心の盗品が往來に落っこちてしまった。しめたと喜んだ老人はそれを拾って、急いでその場を立ち

去った。しかし次の町で、老人は捕らえられて、法廷に引き出された。そこには先刻の四人の若者どもが立っていて、今度はまた口をそろえて、老人の罪を訴えた。ところが裁判官は次のような判決を下した。

老人はそれとっておきの品を若者たちに返さねばならぬ。『その理由は』と、賢明で正しい裁判官は申し渡した、『さもないと、そこにいる四名の者は、国内で不穩事を仕出かしかねないからである。』¹

これは、小説家ブレヒトがギムナジウム時代に書いた「バルカン戦争」という小品である。タイトルのバルカン戦争とは、バルカン同盟（セルビア、ブルガリア、ギリシア、モンテネグロ）とオスマン帝国の間の第一次バルカン戦争（一九一二年一〇月—一九一三年五月）と、ブルガリアがセルビア、ギリシア、モンテネグロ、途中からルーマニア、オスマン帝国も加わり五ヶ国と戦った第二次バルカン戦争（一九一三年六月—一九一三年八月）の二つの戦争を指す。作品中の「老人」はオスマン帝国、「四人の若者」はバルカン同盟諸国である。第一次バルカン戦争はオスマン帝国の敗北におわり、一九一三年五月にロンドン仮講和条約が成立した。オスマン帝国は、この条約でバルカン半島にある領土のうちイスタンブールがある東部のトラキア地方を除くすべてを喪失した。その後、バルカン同盟では、割譲されたマケドニア地方をめぐり内部対立が起こり、第二次バルカン戦争が勃発する。第二次バルカン戦争はブルガリアの敗北に終わり、この戦争で勝利したオスマン帝国はブルガリアから旧領の一部を奪回することができた。

ブレヒトの作品で注目すべきは、「法廷」、「裁判官」、「国内」の三語である。「裁判官」は、オーストリア＝ハンガリー（以下、オーストリア（奥）、イギリス（英）、フランス（仏）、ドイツ（独）、イタリア（伊）、ロシア（露）の六ヶ国を意味する。この六ヶ国は「大国（Great Power）」と言われていた。当時、諸大国は「国内」、すなわち

ヨーロッパ内の安寧秩序に責任を持つべきであると一般に認識されていた。諸大国は、ヨーロッパに危険をもたらす恐れのある問題に対して、「法廷」で協議をおこない、統一見解を作成し、当事国に命令を出すのである。この「法廷」は、国際政治では「ヨーロッパ協調（Concert of Europe）」と表現されるものである。

国際政治学や外交史研究においては、「ヨーロッパ協調」は様々な定義がなされてきた。古典的現実主義に属する日・モーゲンソーは「協調行動によってその政治システムへのすべての脅威に対抗しようとする、列強間の協議による外交」と考え、英国学派の日・ブルは「大国による共同管理」と考えた。また、外交史では、ドイツのW・バウムガルツが「国際的危機の仲裁もしくは戦いのための、そして戦争終結もしくは防止のためのヨーロッパ諸国による協議と協力の方法」と定義している。⁽²⁾

『第一次大戦の起原』の著者J・ジヨルは、バルカン戦争をヨーロッパ協調が機能した最後の機会と主張する。⁽³⁾ たしかに、第二次バルカン戦争が終了した翌年の一九一四年には、ヨーロッパ協調のメンバー、ブレヒトの作品で言う「裁判官」自らが第一次世界大戦という「不穏事」を起こすことになる。バルカン戦争が勃発した一九二二年は、すでに六大国は、三国同盟と三国協商という二つのブロックに分かれていた。では、なぜバルカン戦争をめぐって、六大国は協調できたのであろうか。その協調には、問題はなかったのであろうか。ヨーロッパ協調とブロックの関連性はどのようなものがあつたのか。本稿は、これらの問いに答えようとするものである。

2. ヨーロッパ協調とバルカン半島

〈ヨーロッパ協調〉

ヨーロッパ協調という概念は、ナポレオン戦争後のヨーロッパ新秩序を話し合うウィーン会議の中から誕生した

と言われる。この会議により成立したヨーロッパ秩序をウィーン体制という。⁽⁴⁾メッテルニヒに代表されるウィーン会議の参加者には、革命運動が各国の社会秩序を崩壊させるだけでなく、ヨーロッパ社会の秩序も崩壊させるという恐怖心があった。それ故、メッテルニヒは自らの役割をそのような革命運動から文明の器官 (organs of civilization) を守る医者と考え、医者としての治療法として、ヨーロッパ諸政府の一般的団結、つまり協調を結論づけた。彼にとって、ヨーロッパ協調は主としてヨーロッパの王朝秩序を維持するための手段であった。ウィーン体制初期のヨーロッパ協調は、ウィーン体制の維持を目指したという意味で、イデオロギー的には保守主義、反革命的コンセンサスが存在したと言える。⁽⁵⁾では、ウィーン体制により成立したヨーロッパ協調の具体的方策はどのようなものであったのだろうか。

ヨーロッパ協調は、恒久的組織を持った秩序だった組織ではなく、断続的な存在にすぎない非公式な制度 (informal institution) であった。⁽⁶⁾そして、協調のメンバーは、あくまでもウィーン体制下の大国であるイギリス、ロシア、オーストリア、プロイセン、フランスの五ヶ国であった。この五大国の政治指導者たちは、フランス革命からナポレオン戦争までの経験から、大国間戦争の回避を外交政策の命題とした。というのは、彼らにとって、大国間戦争とは自己の安全を強化するものというよりもむしろ、破壊するものであった。そこで、諸大国が外交を展開する際に、他の大国の利害も考慮することで、自己の要求と行動を適度なものにすべきという暗黙の了解ができあがっていったのである。⁽⁷⁾

このようにして登場したヨーロッパ協調には、R・エルロッドの表現を借りると、「慣例化された規則」が次第に形成されていった。それは、第一に、会議外交 (conference diplomacy) による国際危機の適切な取り扱いである。第二に、ヨーロッパにおける領土変更時における、諸大国の承認の必要性である。つまり、協調に参加する諸

大国は、ヨーロッパの中小国と異なり、排他的特権を有することになる。第三に、ヨーロッパ協調のメンバー、つまり大国は保護され、防衛されねばならない。そして、第四に、諸大国の自尊心を傷つけてはいけない。これは、諸大国が自己の死活的利益に関しても、また自己の威信や名誉に関しても挑戦されてはならないことを意味する。^⑧この観点からすれば、ヨーロッパ協調は、前述のジョルが指摘したように第一次世界大戦直前までは存在していたと言える。^⑨

〈バルカン半島とオスマン帝国〉

バルカン戦争の舞台となったバルカン半島は一四世紀以来オスマン帝国によって支配されていたが、一九世紀前半以降に起こった各地での独立運動の結果、一八三〇年にギリシア、一八七八年にはセルビア、ルーマニア、モンテネグロ、そして一九〇八年にはブルガリアが独立した。モーゲンソーは、第一次世界大戦勃発までの九〇年間ヨーロッパ協調が全面戦争を防止できた理由のひとつに、ヨーロッパ協調が関係する地域が時代とともに拡大していき、ヨーロッパ協調のメンバー（＝大国）間の対立する利害を調整してきたことを挙げている。^⑩この地域の拡大に関して、R・ラングホーンは、一九世紀を（一）クリミア戦争とパリ条約（一八五六年）、（二）アフリカ分割（一八八〇年代中期）、（三）極東危機（一九世紀末—二〇世紀初頭）と三つの時期に区分することで、ヨーロッパ協調のメンバーである諸大国が、一八五六年以降オスマン帝国の領土に関するいわゆる東方問題の最も満足のいく解決法として、ヨーロッパトルコともいわれるバルカン半島のオスマン領をヨーロッパ国際システムの中に組み込むことで、大国間の戦争を回避しようとしたことを指摘する。^⑪

とはいっても、バルカン半島が一八七一年以降も依然として大国間の対立を惹起する可能性を孕む国際政治上

のアリーナであったことは否定できないであろう。特に、オーストリアとロシアは、バルカン半島に直に接するた
めに同地の動向に過敏なほどに反応せざるを得なかった。この文脈で、バルカン戦争をヨーロッパ協調からみた場
合、その特徴は次の二点である。第一に、大国が当事者となっていないことである。バルカン戦争は、ボース戦争、
日露戦争、露土戦争、伊土戦争のように大国のひとつが「周辺」諸国と戦ったものとは異なるのである。第二に、
「ヨーロッパ」で発生したことである。大国の利害対立は、政治的空白領域を利用することで大戦争に発展するこ
とを回避してきたが、時代とともにその領域がヨーロッパの遠方へ移動していき、バルカン戦争勃発時には消滅し
ていたのである。⁽¹²⁾

たとえ、ヨーロッパ協調が「大国の覇権を維持するための制度であり、国際的な決定にもとづくその処置がしば
しば公平な正義の原則からはずれたものである」⁽¹³⁾との批判が存在しても、一九一二年当時の五大国（伊土戦争終了
後はイタリアを含めて六大国）は、バルカン戦争の回避・局地化、そしてヨーロッパ全面戦争の回避をめざして、
この「非大国」間戦争に関与していくのである。

3. 第一次バルカン戦争

〈戦争回避の試み〉

一九〇八年の青年トルコ革命は、オスマン政治に大きな変化をもたらした。立憲主義を当初主張していた青年ト
ルコ政権が、一九一〇年ころから中央集権化と住民のオスマン化に政策を転換させたことは、バルカンのオスマン
帝国内の人々に大きな失望感をもたらした。マケドニアのキリスト教徒は各地で反乱を起こし、また、アルバニア
人は自治を求め反乱を起こした。⁽¹⁴⁾これに乗じて、ブルガリア、セルビア、ギリシア、モンテネグロの四ヶ国が一九

一二年にバルカン同盟を締結した。この同盟は複数の二国同盟からなっており、その中心的存在はブルガリアⅡセ
ルビア条約とブルガリアⅡギリシア条約であった。バルカン同盟成立の要因には、青年トルコ政権の政策転換、一
九一一年の伊土戦争の勃発、ロシアの支援などがあった。ロシアは、オーストリアに対抗するための同盟として考
えていたものの、バルカン諸国はむしろオスマン帝国内の同胞民族の救済、言い換えれば、バルカン半島のオス
マン帝国領の奪取を目指していた。ロシアはバルカン諸国の動きを抑制しようと試みたものの、うまくいかなか
た。⁽¹⁵⁾

ヨーロッパ各国では、バルカン諸国が対オスマン同盟を締結したという噂が一九一二年夏には広まっていた。バ
ルカン半島での戦争がヨーロッパ全体の平和に悪影響を及ぼすであろうと考えた諸大国は、八月から戦争勃発の一
〇月初旬にかけて、ヨーロッパ協調による戦争回避を試みた。

まずは、オーストリアがオスマン帝国の改革実施に関して、イタリアを除く五大国で協議することを提案した。⁽¹⁶⁾
この提案に対して、ロシアとフランスは、三国協商メンバーで意見を統一した上で返答することにした。また、イ
ギリスはオスマン帝国を追いつめるような計画には賛同しかねるとの立場をとったため、それ以降、オーストリア
はこの問題についてはイニシアチブをとらないようになった。⁽¹⁷⁾

九月になると、ロシアが戦争回避のイニシアチブをとった。同国は、バルカン同盟の成立に大きく関与した国家
という点から、オスマン帝国との戦争ではロシアの支援を期待できないことをバルカン諸国に通告することで、戦
争を回避しようとした。それと並行して、ロシアはオスマン帝国に対する改革を要求する共同抗議（collective dem
arche）を諸大国に提案した。しかし、内容的には、オスマン帝国の従来からの主張や八月のオーストリア案の焼き
直しのなものであったため、オーストリア以外からは積極的支持を獲得できなかった。⁽¹⁸⁾

ロシア案をたたき台にして新たな提案を出したのが、フランスであった。九月二二日、フランスは「共同提案 (projet d'accord)」を協商国のイギリスとロシアに提示した。その内容は、(一) 戦争回避のためのバルカン四ヶ国に対する共同抗議の実施、(二) 戦争勃発の際には戦争の局地化と終戦をめざす諸大国の努力、(三) 陸軍もしくは海軍による示威行動が必要な場合の諸大国間の協議、(四) オスマン帝国への改革実施の要求、の四点であった。¹⁹⁾ この提案に対して、イギリスとロシアが (三) について反対したため、フランスは修正案を作成した。その内容は、(一) 平和を破壊するいかなる行為にも諸大国が非難すること、(二) 「バルカン」での領土に関する現状 (status quo) の変更には諸大国は反対すること、(三) 「キリスト教徒」諸民族の利益において、諸大国が「ヨーロッパトルコ」における改革の実施を引き受けること、の三点であった。ロシア、ドイツ、オーストリア三国は賛成したものの、イギリスは、(一) と (二) は奥露代表によつてバルカン四ヶ国に手交され、(三) は諸大国の共同抗議としてオスマン帝国に手交されるべきと主張し、反対した。²⁰⁾

一〇月六日に意見の一致を見た五大国は、一〇月一〇日、バルカン四ヶ国に対しては奥露両外交官が、オスマン帝国に対しては五大国の外交官がそれぞれ共同抗議を実行した。²¹⁾ しかし、この段階でバルカン半島での戦争はもはや避けられない状態であった。九月三〇日にはモンテネグロを除くバルカン同盟三国が、一〇月一日にはモンテネグロが、そして一〇月二日にはオスマン帝国がそれぞれ全面動員をおこない、一〇月八日、ついにモンテネグロがオスマン帝国に宣戦布告をした。第一次バルカン戦争の勃発である。諸大国の共同抗議がおこなわれたのはその後であり、戦争をくい止めることはほとんど不可能に近かったと言える。

〈局地化と終戦の試み〉

戦争が勃発してしまった以上、諸大国はもはや戦争回避のための共同行動ではなく、戦争終結のためのそれを協議しなければならなくなった。諸大国にとって重要だったのは、戦争が諸大国の仲裁によつて終結することであった。一〇月一八日には、ブルガリア、セルビア、ギリシアもオスマン帝国に宣戦布告したことにより、戦闘はバルカン各地に拡大した。

同日、フランスが、諸大国は今後生じることが予想される諸問題の協議の必要性を共同宣言の形でおこなうべきことを提案し、諸大国はこの提案を受諾した。その際、フランスは会議の開催については時期尚早であると考え、諸大国への提案には盛り込まなかった。⁽²²⁾一〇月二十九日、フランスはさらに一歩進んで、諸大国が戦後の領土分割に関心を持たないとの共通の態度を持つべきであるとの提案をだしたが、これに対して、オーストリアが反対した。その理由として、オーストリアは、自国がバルカン半島に隣接する国家として関心をまさに有していることを挙げた。⁽²³⁾フランスはこの提案を三国同盟諸国におこなう際に、フランスが事前に三国協商国のイギリスとロシアと協議を行い、三国協商諸国内ですでに意見の一致をみていることを告げていた。同盟外交の影が見えるこのフランスの方法に対して、ドイツは、オーストリアが反対しているとの理由から、オーストリアと同様に反対を表明した。⁽²⁴⁾パリ駐在伊大使に至つては、提案者の仏首相ポワンカレに対して「三国協商を三国同盟に対置させることを避けるべきだ」と述べた。⁽²⁵⁾

さて、劣勢に立たされたオスマン帝国は一月四日から停戦を求めて諸大国及びバルカン同盟諸国に働きかけるようになった。⁽²⁶⁾最終的には、諸大国は一月一四日にバルカン諸国に停戦を働きかけたが、すでにオスマン帝国自身でバルカン同盟側に同様の要請をおこなっており、バルカン同盟側もそれを受諾したので、停戦に関する諸大国

の直接仲裁は成功しなかった。いずれにせよ、戦争当事国間で二月三日に停戦が実現し、ロンドンで講和交渉をおこなうことが決定された。

〈セルビアのアドリア海進出問題〉

この間、セルビア軍はオスマン帝国領アルバニアに進撃し、一月一九日にはアドリア海沿岸の港を占領した。内陸国セルビアにとって、今回の軍事行動の目的のひとつが港の獲得であった。これに対して、諸大国は様々な反応をした。ロシアがこの行動に賛同した一方で、オーストリアは強く反対した。ドイツとイタリアもオーストリアの意見を支持した。イギリスは、セルビアがアドリア海に通商的出口を求めることは理解できるものの、沿岸地帯の領土獲得には難色を示した。イギリスが危惧したのは、セルビアのアドリア海進出問題により奥露関係が悪化して、ヨーロッパ戦争が勃発することであった。フランスは、セルビアの行動は理解するものの、港の領有を承認するのはあくまでも諸大国の協議、つまりヨーロッパ協調によってのみ可能であるとの立場をとった。

諸大国は、アドリア海問題も含めた戦争全体の解決をヨーロッパ協調、具体的には諸大国代表による会議に求めた。この動きは、一月二一日のドイツのイギリスへの提案から具体的に始まった。⁽²⁷⁾ 諸大国は、会議で取り上げる議題を（一）自治国アルバニアの創設、（二）セルビアのアドリア海へのアクセス権、（三）エーゲ海島嶼の三点とし、開催地をロンドンとすることで一致した。⁽²⁸⁾（二）の背景にあるのは、ロシアとオーストリアの意見対立である。セルビアに本国からアドリア海沿岸までの土地を与えることをロシアが主張したのに対して、オーストリアはそのような土地を一切認めなかった。（二）が会議の議題となったことは、オーストリアの意見が通ったことを意味した。オーストリアのある外交官は、ロシアがセルビア寄りの主張を取り下げた理由には「アレオパゴス」——古代ギ

リシアの最高法廷を意味——の決定、つまり諸大国の一致した決定にセルビアが従わねばならないことを理解させようとしたからだと考えた。⁽²⁹⁾ヨーロッパ全体に大きな影響を与えかねないセルビアのアドリア海進出問題は、諸大国の意向に沿って解決する方向性が見えたのである。

〈ロンドン大使会議—大アルバニアと小アルバニア〉

一二月三日、戦争当事国はロンドンでの講和交渉を開始した。六大国は、彼らに対して講和内容の大枠の決定を六大国に委任するように要請し、戦争当事国はこれを認めた。こうして、ヨーロッパ協調による戦争解決の試みがロンドンで始まった。ロンドン大使会議と呼ばれる。この会議は、司会役の英外相グレイ及び独逸伊仏露の駐在大使の計六人によって構成された。彼らは、必要に応じて会議を開催すること、つまり不定期開催と決定事項の原則非公表の二点を基本原則とすることで一致した。一二月一七日の第一回協議では、二点が決定された。第一に、アルバニアをオスマン帝国領から分離させることである。国境線に関しては、北はモンテネグロ、南はギリシアと接することだけが決められた。第二に、彼らは、セルビアにアドリア海の港の領有を認めず、鉄道によるアクセス権のみを認めたことである。しかし、具体的にどの港を使うのかは未定であり、アクセスのための鉄道もこれから建設しなければならなかった。

グレイは回顧録の中で「塙露間の有益でかつ辛抱強い仲介者として行動することで、協調の維持を努力しようとした」と当時の考えを明らかにしているが、両国は、アルバニアの国境線の大枠をめぐる激しく対立することになった。⁽³⁰⁾その対立は、特に、オスマン帝国領コソヴォをアルバニアとセルビアのどちらに編入するかをめぐるものであった。オーストリアは、アルバニアを「生存可能な」状態にするためにも、また、コソヴォの民族構成上の観

点⁽³¹⁾からも、アルバニア領とするべきであると考えていた。これに対して、ロシアは、アドリア海進出問題で事実上オーストリアに屈服しており、コソヴォをめぐる問題ではもはやセルビアを見捨てることができないと考えていた。こうしたコソヴォをめぐる問題が解決をみるのは、北部アルバニアの中心都市スクタリをめぐるモンテネグロの動きによってであった。

モンテネグロは当初からスクタリの獲得をめざし戦争を開始し、オスマン帝国軍が駐屯していたスクタリを包囲し続けていた。ロンドン大使会議はスクタリをアルバニア領にした。ロンドン大使会議開催以来、六大国はモンテネグロに対して大使会議の決定の遵守を共同抗議の形で何度も要請してきたものの、モンテネグロはその受諾を拒否し続けた。また、六大国内の意見の調整も困難を極めた。ロシアが、モンテネグロを説得するためには都市スクタリ以外の、つまりスクタリ周辺の地域を与えるべきと主張した一方、オーストリアは、都市スクタリとその周辺の地域の一体性を強く主張したのである。さらに、問題の解決をより困難にしたのが、既述のように、両国がコソヴォの領有をめぐる対立したことである。

一九一三年二月になると、ドイツとイギリスは事態の打開のために共同提案をおこなったが、事態は進展しなかった。⁽³²⁾その間、モンテネグロ軍によるスクタリ包囲は続き、スクタリ陥落の可能性が出てきた。オーストリアは、自国のバルカン政策におけるアルバニアの位置づけを高く評価していた。さらに、スクタリをアルバニア領にすることは、オーストリアの望む「生存可能な」アルバニアにとって必要不可欠なことであった。そのようなことから、オーストリアは三月二二日、コソヴォ問題でロシアに妥協することでスクタリ問題の解決を目指すことにし、コソヴォをセルビア領とすることに同意した。

〈「ヨーロッパ」対小国—モンテネグロのスクタリ要求問題〉

三月二六日のロンドン大使会議では、英外相グレイが、共同抗議の失敗の場合、モンテネグロ沖での諸大国合同の海軍示威行動もあり得るとの発言をした。これにオーストリアは賛成する一方、フランスは四月三日に英墺二国による海軍示威行動を提案した。グレイはこの提案に対して、「直接利害がない問題で、イギリスがヨーロッパのために執行者の責任を負うことをイギリス〔国民〕は認めないであろう」とあくまでも諸大国の合同という考えに固執した。⁽³³⁾ 各国が賛成したことを受けて、四月一〇日にロシアを除く五大国の海軍による海上封鎖が実施された。

ロシアの不参加は、当時地中海に海軍を展開していなかったためであり、ロシアはこの海上封鎖には外交的支持を表明した。合同艦隊司令官のイギリスのバーニー提督は、モンテネグロに「ヨーロッパの諸大国を代表する合同艦隊の名において」で始まる文書を渡し、この行動があくまでも「ヨーロッパ」の決定を履行するものであることを強調した。⁽³⁴⁾

ところが、ヨーロッパ協調メンバーが海上封鎖を実施しても、モンテネグロは依然としてスクタリ包囲を継続した。そして四月二二日、スクタリが陥落したことで、ヨーロッパ協調の決定を履行する可能性がより一層少なくなっていた。

陥落前に墮外相ベルヒトルトは、示威行動失敗の場合には部隊の上陸しか選択肢がないと考えていた。その際、ウィーン駐在英大使に「ヨーロッパ協調から離脱するつもりはない。しかし、事態がゆゆしくなるにつれて、諸大国が途中であきらめないことを希望する」と述べ、諸大国との一体性を重視していた。⁽³⁵⁾ ところが、四月二五日のロンドン大使会議では、上陸案をめぐる諸大国間の意見は一致せず、三国同盟諸国は賛成、三国協商諸国は反対を表明した。オーストリアは、部隊の上陸によるスクタリ奪回という強制措置しかヨーロッパには残されていないと

主張し、単独行動回避のために、あくまでも塙伊もしくは塙伊英による軍事行動を希望した。また、英外相グレイは「ヨーロッパ協調を実行する国家の軍事行動には反対できない」との見解を持っており、ロシアもモンテネグロの港に限定する占領なら認める立場をとった。

いずれにせよ、塙外相ベルヒトルトのヨーロッパ協調への期待は減少していった。他方、意見の一致を見いだすことができなかった諸大国は、オーストリアが単独で軍事行動に着手することを危惧した。

モンテネグロのスクタリ占領が既成事実化することによって、「生存可能な」アルバニアの実現が困難になるとを危惧したオーストリアの最高意思決定機関である共通閣僚会議は、五月二日、ロンドン大使会議の決定を履行するため、対モンテネグロ戦争もしくはスクタリからのモンテネグロ撤退を目的とするイタリアとの軍事協力の模索と、モンテネグロ国境地方での事実上の動員を決定した。戦争も辞さないオーストリアの態度を察知したモンテネグロは、直ちにスクタリからの撤退を決定した。こうして、戦争は回避された。なお、スクタリはその後海上封鎖に参加した五大国の海軍陸戦隊によって管理されることになり、第一次世界大戦勃発直後までアルバニアの治安維持に一役買うこととなった。

〈もうひとつのヨーロッパ協調の試み——ブルガリア＝ルーマニア国境線問題〉

なお、第一次バルカン戦争の時期に、六大国がヨーロッパ協調によって「小国」間の対立を解決した事例として、ブルガリアとルーマニアの国境線修正問題がある。ブルガリアによる領土拡大によってバルカン諸国間のパワー・バランスが崩壊することを懸念したルーマニアは、オスマン帝国の敗北が決定的となった一九一二年一月初旬にブルガリアに対して、事実上の領土の割譲を意味する国境線の修正を要求してきた。ブルガリアがこの要求を受け

いれるはずはなく、両国の関係は緊張していった。六大国の勧告もあり、両国は交渉したもの、解決の糸口は見つからなかった。そこで、六大国は、国境線問題による戦争突入を防止するためヨーロッパ協調によって問題解決を目指すことを決定し、両国に六大国の仲裁を受諾することを要請した。両国の受諾によって、一九一三年三月三十一日にペテルスブルクで国境線問題を協議する会議が開催された。ペテルスブルク大使会議と呼ばれる。この会議の特徴は、六大国が解決策をめぐり当初から三国同盟側と三国協商側に分裂したことである。三国同盟側、特にオーストリアが、ブルガリアの一部をルーマニアに割譲する代償として、ブルガリアにエーゲ海沿岸の一部を与え、これを主張したが、三国協商側はブルガリアへの領土的代償を不必要なものと反論した。このため、三国同盟側が三国協商側に妥協することで、ようやくペテルスブルク大使会議は六大国の一致した見解をまとめ上げることができた。その内容に対して、国境線問題の当事国であるブルガリアとルーマニアはともに満足せず、双方が不満のままヨーロッパ協調による決定を受諾したのである。³⁶⁾

4. 第二次バルカン戦争

〈ロシアによる「同盟内戦争」回避の試み〉

第一次バルカン戦争は、バルカン同盟の勝利に終わり、五月下旬のロンドン仮講和条約によって終結することになった。オスマン帝国はバルカン半島の領土のうち東部の一部を残してすべて喪失した。ロンドン大使会議の決定によって、アルバニア地方の独立と、マケドニア地方のバルカン同盟への割譲が決まった。諸大国によるアルバニア建国の決定によってアドリア海進出が阻止されセルビアは、一九一三年五月にブルガリアに対して二国条約で決めていたマケドニア分割の内容に関する修正協議を申し出たものの、ブルガリアはこれを拒絶した。また、ギリシ

アは第一次バルカン戦争で占領した領域、特にマケドニアの中心地サロニキをめぐってブルガリアと関係が悪化していった。

ロシアは、バルカン同盟の崩壊を防止するために、ヨーロッパ協調を活用しようとした。六月五日のロンドン大使会議で、ロシア大使は、六大国が共同抗議の形で戦争当事国に対して即時動員解除を要請することを提案した³⁷⁾。それとは別に、ロシアは単独でバルカン同盟の崩壊阻止のための行動にも出、六月八日にセルビアとブルガリアに対して、「スラブ民族の絆」という文言を使って、ブルガリア＝セルビア条約に従ってロシアによる仲裁を訴えたのである。また、ロシアは、バルカン同盟四ヶ国の首脳をペテルスブルクに招待することで内部対立の解消を目指した。このような動きに対して、当初オーストリアは、残り四大国と同様にロンドン大使会議のロシア案に賛成を表明していた³⁸⁾。しかし、ロシアの単独行動を知って、オーストリアの共同抗議への参加があたかもロシアの単独行動を承認しているかのごとき印象を与えてしまうことを危惧して、六月二〇日に共同抗議への参加を拒否したのである³⁹⁾。

バルカン同盟内の対立は一層激しさを増し、ロシアによる仲介工作も失敗し、ついに六月三〇日、ブルガリアはセルビア及びギリシアと交戦状態に入った。第二次バルカン戦争の勃発である。しかし、戦争を始めたブルガリア軍はたちまち反撃されて、窮地に陥ることとなった。

《機能しないヨーロッパ協調》

戦争勃発の前後において、諸大国は、戦争にどのような態度をとるかについて、介入論と不介入論で意見が分かれた。イギリスとフランスは、六月二七日のロンドンでの英仏首脳会談において、オーストリアを除く五大国が戦

争への不介入を宣言することで、オーストリアの戦争への軍事介入を阻止できるのではないかと結論づけた。英外相グレイは、七月三日のドイツ大使との会談において、英独が不介入という点で一致できることを確認した。⁽⁴⁰⁾

その一方で、オーストリアは不介入に難色を示した。塙外相ベルヒルトは、六月後半の時点で、ブルガリアⅡセルビア戦争の場合には原則として戦争の推移を見守るものの、ブルガリアが短期間で敗北するようなことがあれば、ブルガリアを助けるために武力介入することを考えていた。⁽⁴¹⁾この背景には、塙首脳部がブルガリアをセルビアに対する「釣り合いもあり」として考えていたからである。領内にスラブ系諸民族が居住するオーストリアにとって、セルビアがバルカンで勢力を拡大することは、スラブ系民族がセルビア国家へのシンパシーを増長させてしまい、その結果、帝国の崩壊を惹起することを意味した。ヨーロッパ協調によって、それを防止できないときは、オーストリアは、三国同盟に依拠した同盟政策か、単独行動によって自国の生存を確保しなければならなかった。オーストリアの見解に対して、同盟国のドイツとイタリアは、オーストリアのセルビア攻撃を支持するつもりはなかった。七月三、四日のドイツでの独伊外相会談において、両外相は、たとえセルビアがブルガリアに対して大勝利を収めても、オーストリアには武力介入する根拠がないと結論づけた。⁽⁴²⁾それ故、独首相ベートマン・ホルヴェークは七月六日に塙大使に、オーストリアの直接介入が避けられ得るものと主張したのである。⁽⁴³⁾

七月八日のロンドン大使会議では、英外相グレイが、五大国の大使に対して、諸大国が第二次バルカン戦争の局地化と同戦争への不介入を事前に公に宣言するべきであると提案した。⁽⁴⁴⁾その後、独伊仏の各大使は不介入支持を表明したが、塙大使は、自国の行動を拘束するような事前の宣言には同意できないと述べ、不介入の宣言に反対した。⁽⁴⁵⁾ブルガリアが短期間で大敗北したこの戦争に対して、実際にはオーストリアは軍事介入しなかった。その理由には、前述の独伊の不支持の他に、塙の同盟国ルーマニア軍が七月一日にブルガリア領内に侵攻したことも挙げら

れる。セルビアとギリシアに加えてルーマニアがブルガリアを攻撃したことで、ブルガリアの敗北は誰の目にも明らかとなった。⁽⁴⁶⁾ オーストリアは、ブルガリアと戦っているセルビアを攻撃することによって、ルーマニアとも敵対関係になってしまうことを危惧した。それ故、オーストリアは軍事介入を断念したのである。⁽⁴⁷⁾

ブルガリア・ルーマニア戦争と前後して、ロシアは、七月八日にヨーロッパ協調ではなく単独で、旧バルカン同盟四ヶ国に対して、即時停戦と講和の基礎となる内容をペテルスブルクで交渉すべきことを呼びかけた。⁽⁴⁸⁾ しかし、セルビアとギリシアは、ロシアの外交的介入を阻止するためにこれを拒否し、ロシアの仲介工作は失敗に終わった。

七月一五日、オーストリアは、諸大国がセルビア、ギリシア、ブルガリアの三ヶ国に対して領土問題を取り上げない形の敵対行為の即時中止を勧告すべきことを五大国に提案した。⁽⁴⁹⁾ しかし、各国の反応は芳しいものではなかった。フランスとドイツは、オーストリアの主張に一応の賛成を表明し、両国とも領土問題を扱わない形の共同抗議なら応じると返答した。ロシアは、戦争当事国だけの交渉がおこなわれることを理由に、オーストリアの提案する共同抗議の直接的動機がないとの立場をとった。この主張を述べた露外相サゾフによれば、重要なことは敵対行為の即時中止であって、バルカンの領土変更ではなかった。また、イギリスは、敵対行為の中止要請はすぐに領土問題を取り上げることになるであろうと考えた。⁽⁵⁰⁾ こうして、ヨーロッパ協調は機能しなかった。

〈ブカレスト講和会議〉

七月三〇日、ブカレストにはセルビア、ギリシア、ブルガリア、モンテネグロ、そしてルーマニアの各代表が集まった。七月一六日にブルガリアと交戦状態に張っていたオスマン帝国がブカレストでの交渉への参加を希望したものの、ルーマニアは「同盟国間での領土問題の話し合いを排他的におこなうため」との理由をつけて拒否した。

バルカン五ヶ国は、翌三一日から五日間の停戦を決定し、講和交渉に入った。八月七日に最終的決着をみたブカレスト講和会議は、ヨーロッパ協調が全く関与できなかったところに外交史上の意義があるように思われる。また、第一次バルカン戦争中までは、スラブの「後見人」としてバルカン諸国に大きな影響を持っていたロシアが、ブルースト講和会議の開催をめぐりほとんど関与できなかったことは、この会議はロシアにとって外交的敗北であったとも言える。⁽⁵¹⁾

〈一九一三年一〇月危機—一九一四年七月危機の序幕？〉

二つのバルカン戦争の結果、セルビアとギリシアはその領土を拡大させた。セルビアの領土拡大は、オーストリアにとって帝国の存続にとって死活的問題となった。これは、エルロッドのいう「協調のメンバーは保護されるべし」というヨーロッパ協調の規則に抵触するものであった。

第二次バルカン戦争が終わっても、ヨーロッパ協調によって建国が決まったアルバニアをめぐる問題は依然として残っていた。その問題のひとつが、アルバニア領内に駐留を続けるセルビア軍の動向であった。ロンドン大使会議は、八月一日に夏期休暇の名目で散会していた。八月一七日、六大国は、セルビアに対してアルバニアからの軍の撤退に関する共同抗議をおこなった。⁽⁵³⁾しかし、その後もセルビア軍がアルバニア領内に駐留を続けたため、九月四日、オーストリアは諸大国に対して、あくまでもセルビア軍のアルバニア全域からの撤退を求める共同抗議の必要性を今一度主張した。⁽⁵⁴⁾ところが、フランスとロシアが、オーストリアの求めるアルバニア全域からの撤退とは異なる訓令を現地外交官に与えたために、六大国が一致した上での共同抗議書の作成が不可能になってしまった。⁽⁵⁵⁾九月一三日、現地のオーストリア外交官は、やむを得ず単独でセルビアにアルバニア全域からの撤退を求めた。

事態の進展はその後ほとんど見られず、ヨーロッパ協調もほとんど機能しない状態であった。また、アルバニアセルビア国境付近では、現地のアルバニア人とセルビア軍の武力衝突が続き、オーストリアにはセルビア軍がアルバニア領内をさらに進撃しているとの情報も届くようになった。オーストリアのたび重なる共同抗議の実施要請も、特にロシアが反対したため実現できない状態であった。そのため、オーストリアは一〇月一日に現地外交官を通じて、セルビアに再び単独でロンドン大使会議の決定の遵守を口頭で伝えた。⁽⁵⁶⁾

オーストリアは、ヨーロッパ協調がアルバニアの安全、オーストリアのバルカン政策を保証するものではないと考えるようになった。オーストリアは熟慮の末、一〇月一八日にセルビアに対する最後通牒を手交した。その要旨は、(一)セルビア政府がロンドン大使会議で決定されたアルバニアの国境線を侵害していること、(二)セルビア軍のアルバニア領内からの八日以内の撤退、(三)撤退がおこなわれない場合には、オーストリアにとって要求実現のために適当と判断された手段の実行、の三点である。⁽⁵⁷⁾ (三)の内容は、オーストリアがロンドン大使会議の決定を履行するためには、対セルビア戦争の可能性もあることを示唆していた。

諸大国の反応は様々であった。同盟国ドイツは、セルビアとの戦争を暗示する最後通牒の文面を事前に正式通告しなかったことに対して不満を持ったものの、最終的にはオーストリアの全面支援を約束した。また、同盟国イタリアはこの事前協議なしのオーストリアの強硬な措置に反感を抱いた。イギリスは、最後通牒を手交した行動それ自体が、ヨーロッパ協調を破壊する行為に他ならないと批判した。フランスでは、事前にオーストリアの行動について諸大国間で協議がなされなかったことに不満が出た。セルビアは、最後通牒を受け取った後、露仏から説得されたこともあって、期日内の撤退を完了させた。⁽⁵⁸⁾ オーストリアセルビア戦争の危険性は回避されたのである。これが「一〇月危機」である。

5. おわりに

一九一二年一〇月の第一次バルカン戦争の勃発から一九一三年一〇月の「一〇月危機」までの諸大国の紛争解決の試みを見てきた。特徴的なことを挙げれば、第一に、ヨーロッパ協調が最も成功した時期が、セルビアのアドリア海進出問題の解決から、スクタリ陥落直前までの時期であったことである。後者に関連して無視できない点は、モンテネグロがスクタリ放棄を決意した最大の要因がヨーロッパ協調というよりも、むしろオーストリアの単独軍事行動の脅しだったことである。⁽⁵⁹⁾ それは、当時のヨーロッパ協調の履行における限界を示唆するものだと言える。第一次バルカン戦争終了以降、ヨーロッパ協調は事実上機能しなかったと言つて良い。

第二に、大国とヨーロッパ協調の関係を考えてみると、諸大国はヨーロッパ協調よりも自国の同盟関係の方を重視する傾向を持っていたことである。ロンドン大使会議で司会役を担当した英外相グレーが、スクタリ問題に関して「ロシアの意図に反して行動すること、フランスと別個に行動すること」の危険性を認識していたことはその現れである。⁽⁶⁰⁾ また、前述の一九一二年九月のフランスが「共同提案 (projec d'accord)」を提案したときも、フランスが同盟関係の方を重視していたことを示唆している。

第三に、三国同盟と三国協商という個々の同盟内の主導権争いもしくは国家間関係である。ドイツとイタリアが第二次バルカン戦争においてオーストリアに示した態度、つまり軍事介入の不支持という態度は、必ずしも同盟があてにならないことを明らかにするものである。

第四に、大国と小国の関係である。バルカン戦争の勃発は、ロシアがバルカン同盟、特にブルガリアとセルビアの動きを制御できなかったことに由来した。⁽⁶¹⁾ また、オーストリアの外交が、バルカンの唯一の同盟国ルーマニアの

動向に大きく左右されたことは、ある意味、大国と小国の力関係が逆転した状態と言えるかもしれない。

第五に、バルカン戦争及び「一〇月危機」が、大国の死活的利益や威信に直接影響を与える出来事だったことである。前述のエルロッドの指摘した「大国の保護」と「大国の自尊心の尊重」がここで再び意味を持つ。オーストリアの感覚は、この時期にオーストリアが大国として保護されなくなり、かつ自尊心までも傷つけられた、というものであった。しかも、傷つけた張本人は小国セルビアであった。最終的にオーストリア国内では、「ヨーロッパ協調をあてにすることはできない」、そして「単独行動は結果をもたらす」という危険な結論が台頭していったのである。⁽⁶²⁾

P・シュレーダーは、当時の三国協商諸国がオーストリアを利益、権利、影響圏、威厳が考慮される「大国」と扱わなかった、と指摘する。⁽⁶³⁾ ヨーロッパ協調では、ある国家が秩序維持に重要な負担を担っている場合には、支援されねばならない。⁽⁶⁴⁾ オーストリアに対しては、それがなされなかったのである。三国協商に見放され、ヨーロッパ協調に幻滅したオーストリアは、こうして第一次世界大戦への道を歩み始めたのである。

- (1) 岩淵達治・長谷川四郎編『プレヒトの小説 新装新版』（河出書房新社、二〇〇七年）一頁。
- (2) ハンス・J・モーゲンソー（現代平和研究会訳）『国際政治』（福村出版、一九八六年）二三三頁。ヘドリー・ブル（臼杵英一訳）『国際社会論』（岩波書店、二〇〇〇年）二七二頁。Winfried Baumgart, *Vom Europäischen Konzert zum Völkerbund*, (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1987), S.1.
- (3) ジェームズ・ジョル（池田清訳）『第一次大戦の起原』（みすず書房、一九八七年）八三頁。
- (4) ウィーン会議及びウィーン体制の特徴については、非常に多くの研究がおこなわれているが、さしあたり以下のものを参照した。高坂正堯『古典外交の成熟と崩壊』（中央公論社、昭和五三年）。G・ジョン・アイケンベリー（鈴木康雄訳）

- 『アフター・ヴィクトリー』（N・T・T出版、二〇〇四年）第四章。
- (5) Carsten Holbraad, *The Concert of Europe: A Study in German and British International Theory 1815-1914*, (London: Longman, 1970), pp.8, 29-33; Richard B. Elrod, "The Concert of Europe: A Fresh Look at an International System", in: *World Politics*, vol.28 no.2 (Jan. 1976), p.171.
- (6) Holbraad, *The Concert of Europe*, p.2.
- (7) Elrod, "The Concert of Europe", p.164; Robert Jervis, "Security regimes", in: Stephen D. Krasner(ed), *International Regimes*, (Ithaca and London: Cornell U.P., 1983), pp.179-181.
- (8) Elrod, "The Concert of Europe", pp.164-164.
- (9) ただし、ウィーン会議で誕生したヨーロッパ協調がいつまで存在したかについては、いくつかの見解がある。本稿では検討する余裕がないが、大きく分類すると、(一)一八八〇年代、(二)一八五六年のクリミア戦争、(三)一九一三年（つまり、第一次世界大戦直前）の三つである。Friedrich Kießling, *Gegen den "großen Krieg"? : Entspannung in den internationalen Beziehungen 1911-1914*, (München Oldenbourg, 2002), S.150-154; Baumgart, *Vom Europäischen Konzert zum Völkerbund*, S.1-18; F.R.Bridge and Roger Bullen, *The Great Powers and the European States System 1815-1914*, (London: Longman, 1982), pp.4-14; Richard Langhorne, *The Collapse of the Concert of Europe*, (London: Macmillan, 1981), p.4; Elrod, "The Concert of Europe", p.173; Holbraad, *The Concert of Europe*, p.2; C.J. Bartlett, *Peace, war and the European Powers 1814-1914*, (London: Macmillan, 1996), p.70.
- (10) モーゲンソー『国際政治』四七三頁。
- (11) Langhorne, *The Collapse of the Concert of Europe*, p.9f.
- (12) モーゲンソー『国際政治』三七—三七三頁。
- (13) 川田侃『国際関係論』（東京大学出版会、一九五八年）二〇四頁。
- (14) この時期のオスマン帝国の状況については以下のものを参照せよ。柴宜弘編『バルカン史』（山川出版社、一九九八年）一三二—一三八頁。ジョルジュ・カステラン（山口俊章訳）『バルカン』（サイマル出版、一九九四年）二二—二四二頁。
- (15) 奥山倫子「ロシアのバルカン政策（一）」『法学論叢』（京都大学）第一二七巻第五号、五四—五九頁。馬場優『オースト

リアーハンガリーとバルカン戦争』(法政大学出版局、二〇〇六年)一七四—一七七頁。

- (16) オーストリアの提案は八月一三日の第一回覚書と八月二九日の第二回覚書の二種類がある。Ludwig Bittner, Alfred F. Pribram, Heinrich Srbik und Hans Übersberger(hrsg.), *Österreich-Ungarns Ausenpolitik von der Bosnischen Kriese 1908 bis zum Kriegausbruch 1914* (以下 *OUA*)。Bde.8. (Wien: Österreichischer Bundesverlag, 1930), Nr.3687, 3744. イタリアは平時伊土戦争継続中であつたため、参加を望まなかつたのがヨーロッパの一般的考へであつた。
- (17) *OUA*, Nr.3756, 3776. Ministère des Affaires Étrangères, *Documents Diplomatiques Français (1871-1914)* (以下 *DD F*), sér.3 (1911-1914), III. (Paris: Imprimerie Nationale, 1931), no.357. Ernst Christian Helmreich, *The Diplomacy of the Balkan Wars 1912-1913*. (New York: Russel & Russel, 1969), pp.119f.
- (18) *OUA*, Nr.3812, 3813, 3816. *DDF*, sér.3, III, no.428. Andrew Rossos, *Russia and the Balkans: Inter-Balkan rivalries and Russian foreign policy 1908-1914*. (Toronto: University of Toronto Press, 1981), pp.64-66. Helmreich, *The Diplomacy of the Balkan Wars*, pp.120f.
- (19) *DDF*, sér.3, III, no.451. Rossos, *Russia and the Balkans*, p.67.
- (20) Rossos, *Russia and the Balkans*, pp.67-73. Helmreich, *The Diplomacy of the Balkan Wars*, pp.123, 127. 以下書に英註をIE. Gueshoff, *The Balkan League*. (London: John Murray, 1915), p.52. に掲載を述べよう。
- (21) *OUA*, Nr.4025, 4026. *DDF*, sér.3, IV, no.110.
- (22) *OUA*, Nr.4137. G.P. Gooch and Harold Temperley(eds.), *British Documents on the Origins of the War 1898-1914* (以下 *BD*), vol.9-2. (London: Her Britannic Majesty's Office, 1934), no.46.
- (23) *OUA*, Nr.4216. *BD*, vol.9-2, no.83. John Lepsius, Albert Mendelssohn Bartholdy und Friedrich Thimmehrsg.), *Die Große Politik der Europäischen Kabinette 1871-1914* (以下 *GP*)。Bde.40. (Berlin: Deutsche Verlagsgesellschaft für Politik und Geschichte, 1922-1927), Nr.12310. *DDF*, sér.3, IV, no.297, 304.
- (24) *GP*, Nr.12307, 12311. 独外相キターレンは、仏首相ポワンカレがあたかも三国協商の全権者のように振る舞つてゐるのべ、三国同盟諸国が一体となつて返答をするのが大切である、との見解をベルリン駐在獨大使に述べてゐる。なお、イタリアもフランス案に反対を表明した。 see. *OUA*, Nr.4221, 4270.

- (25) *OUA*, Nr.4338.
- (26) *OUA*, Nr.4265,4268, 4295.
- (27) この背景には、当時のドイツの対英接近の方針があった。詳しくは、タランブトンの著作を見よ。R.J.Crampton, *The Hollow Detente: Anglo-German Relation in the Balkans, 1911-1914*. (London: George Prior Publishers, 1979). see, Zara Steiner and Keith Neilson, *Britain and the Origins of the First World War*, Second Edition, (London: Palgrave Macmillan, 2003), p. 119.
- (28) *GP*, Nr.12502. *BD*, vol.9-2, no.243, 270. 以下、開催地の候補のめぐりを見よ。Steiner, *Britain and the Origins of the First World War*, p.119. Viscount Grey of Fallodon, K.G., *Twenty-Five Years 1892-1916*, vol.1. (New York: Frederick A. Stokes Company, 1925), p.255.
- (29) 馬場『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争』八一頁。ホルブラードによると、この表現は当時の英語圏で「ヨーロッパ協調」を意味した。Holbrad, *The Concert of Europe*, p.5.
- (30) Grey, *Twenty-five Years*, p.263.
- (31) オーストリアが一八九六年に作成した統計資料によると、オーストリアはコンヴォの多数派をアルバニア人と考えていた。Haus, Hof, und Staatsarchiv Wien, Nachlaß Szápáry, Karton 4, Memoire über Albanien.
- (32) *GP*, Nr.12799. この時代の英独テタメントのひまの象徴である。
- (33) *OUA*, Nr.6314, 6347, 6384. *GP*, Nr.13021, 12058. *BD*, vol.9-2, no.762, 766, 802.
- (34) Haus, Hof, und Staatsarchiv Wien, Politische Archiv XII, Karton 427, K.u.k. Kriegsministerium, Marinesektion, O.K./M. S. Nr.1786, Wien, 14.4.1913.
- (35) *BD*, vol.9-2, no.812.
- (36) この国境線修正問題に関しては、馬場『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争』を見よ。
- (37) *OUA*, Nr.7282.
- (38) *OUA*, Nr.7369.
- (39) *OUA*, Nr.7368, 7430.

- (40) *BD*, vol.9-2, no.1090, 1108.
- (41) Conrad von Hötzenndorff, *Aus Meiner Dienstzeit 1906-1918*, Bd.3, (Wien: Rikola Verlag, 1922), S.353f.
- (42) Fritz Fischer, *Krieg der Illusion*, (Düsseldorf: Droste Verlag, 1987), S.304, GP, Nr.13493.
- (43) *OUA*, Nr.7646.
- (44) *OUA*, Nr.7690
- (45) *OUA*, Nr.7699, 7703.
- (46) 第二次バルカン戦争において、モンテネグロは一個師団(三個旅団から構成)約一万二〇〇〇人をセルビア第一軍と第三軍の一部として参加させたが、彼らは実際には戦略的予備部隊的な位置づけしかなかった。Richard C. Hall, *The Balkan Wars 1912-1913*, (London: Routledge, 2000), p.109.
- (47) 詳しくは、馬場『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争』二二二—二二九頁を見よ。
- (48) Heinreich, *The Diplomacy of the Balkan Wars*, p.381. *BD*, vol.9-2, no.1131.
- (49) *OUA*, Nr.7772.
- (50) *OUA*, Nr.7790, 7792, 7798. *BD*, vol.9-2, no.1157. オーストリアがセルビア、ギリシア、ブルガリアのみを共同抗議の対象にして、ルーマニアを除外したのは、奥外相ベルヒルトがルーマニア軍の進軍中止を要請するのは、ロシアの方が良いと考えたからであった。なお七月一七日には、ロシアがフランスと共同してルーマニアの説得にあたった。ルーマニアは、現時点での軍事的成果が乏しいこと、そしてバルカン諸国が一堂に集まる会議の日時と場所が正式には未決定であることを理由にして、進軍を停止させることはできなうと返答した。*OUA*, Nr.7799, 7800.
- (51) Rossos, *Russia and the Balkans*, p.197. 「後見人」外交については次のものを見よ。奥山倫子「ロシアのバルカン政策——『後見人』外交とロシアの『国益』——(一)」「(二)」『法学論叢』(京都大学) 第一二七巻第五号、第一二九巻第一号。
- (52) このように一〇月危機を表現するのは、ハンガリー人研究者ガラランタイである。József Galántai, "Austria-Hungary and the War: The October 1913 Crisis — Prelude to July 1914", in: *Studia Historica*, (Academiae Scientiarum Hungaricae), vol.162(1980).
- (53) *OUA*, Nr.8410.

- (54) *OUA*, Nr.8541.
- (55) *OUA*, Nr.8617, 8618.
- (56) *OUA*, Nr.8764, 8765, 8766.
- (57) *OUA*, Nr.8850.
- (58) *OUA*, Nr.8869, 8872, 8864, 8866, 8867, 8874, 8888, *BD*, vol.10-1, no.48.
- (59) Bridge, *The Great Powers and the European States System*, p.173.
- (60) Steiner, *Britain and the Origins of the First World War*, p.120. 英外務省高官のニコルソンが「英露関係を弱体化させる政策をイギリスはもうなすべきではない」と同様の見解を持っていた。*BD*, vol.9-2, no.428.
- (61) 奥山「ロシアのバルカン政策（一）」五九頁。
- (62) Bridge, *The Great Powers and the European States System*, p.173.
- (63) Paul Schroeder, "The Nineteenth Century System: Balance of Power to Political Equilibrium?", in: *Systems, Stability, and Statecraft: Essays on the International History of Modern Europe*, (New York: Palgrave Macmillan, 2004), p.238. ベテルスブルク駐在英大使が露外相サビンフとの会見の報告書で、オーストリアとイタリヤの同盟を「ドイツの二つの衛星国 (Germany's two satellites)」として表現を使っている。*BD*, vol.9-2, no.1173. see, Steiner, *Britain and the Origins of the First World War*, p.119.
- (64) Elrod, "The Concert of Europe", p.171.